

## 高校教育を変えたセンター試験、「学力低下論争」が転機

有料記事

増谷 文生 2019年1月20日07時09分



センター試験志願者数の推移

30回目となる大学入試センター試験が19日、始まった。18歳人口が減り、大学進学率が伸びるなか、高校教育にも影響を与えてきたが、来年1月を最後に「大学入学共通テスト」にバトンを渡す。

センター試験は、主に国公立大を対象に11年続いた共通1次試験が、「大学の序列化を進める」などと批判されたことを受けて導入され、1990年に始まった。一律5教科が原則だった共通1次と異なり、各大学が使う教科を自由に選べる「アラカルト方式」をとり、私立大の利用も容易にした。

結果的に、センター試験に参加する4年制大学は初年度の148大学から703大学に増え、特に私立大は16大学から531大学に膨らんだ。04年から参加する短大は今年、149大学になった。この間、18歳人口は約201万人から約118万人まで減ったが、センター試験の受験生は50万人以上を維持している。

センター試験が高校に与えた影響で特に大きかったのは、2006年に英語へ「リスニング」を導入したことだった。当初は機器のトラブルなどに注目が集まったが、文部科学省は導入を機に高校などで「聞く」の指導が重視されるようになり、高校生のリスニング力の向上につながったとみる。17年の同省による高校生調査では、リーディングの力と同水準だった。

長く大学入試を分析してきた坂口幸世・代ゼミ教育総研主幹研究員は、「学力低下論争」が1990年代後半に起きて以降、センター試験の考え方が変わったとみる。「高校教育に悪い影響を与えないように、と注意深く実施していたものが、一転して高校教育を方向付けするようになった。リスニングはその典型で、国際化への対応として、きわめて政治的に決められた」と話す。

大学側もセンター試験を意識しており、センター試験だけで合格者を決める入試も増えている。坂口氏は「有力大では、個別試験の合格者は3～5割入学するが、センター試験だけの合格者は1割程度。多くの私大は、志願者を増やす手段としてセンター試験を使っている」と指摘。「各大学の2次試験と組み合わせて使われる想定で導入されたが、大学側が新たな使い方

を見つけて広く活用するようになった」と話す。

一方、大学側がセンターに頼っている部分もある。90年に24・6%だった4年制大学への進学率は昨年、53・3%に達した。天野郁夫・東京大名誉教授（教育社会学）は、「これまで大学に来ていなかった層の学力を確認することが重要になった。大学の作問能力も低下し、良問を提供し続ける共通試験の必要性は高まってきた」と指摘する。

そんななか、2021年からは共通テストが始まる。センター試験より「思考力・判断力・表現力」を重視するため、複数の資料から情報を読み取る問題を各教科に盛り込み、国語と数学は記述式問題を導入。英語は「リスニング効果」の再現を図ろうと、「読む・聞く・話す・書く」の4技能を測る民間試験を活用するが、24年1月まではセンターが「読む・聞く」の2技能試験も作り続ける。

共通テストはセンター試験より多様な力を測ろうとしており、早稲田大や上智大などの有力私大も活用を決めるなど、役割がさらに重要になる部分もある。しかし、副業で取り組む大学教員が中心になって作問する体制は変わらない。天野氏は「センターは常勤の研究部の人数を増やすなど専門家集団をしっかりと育て、共通1次からの40年の蓄積を共通テストにも生かしていくべきだ」と求める。（増谷文生）

## 大学入試センター試験の歴史

1990年 共通1次の後継としてスタート。148大学が参加、志願者は43万人

93年 志願者数が50万人を突破

97年 「地理歴史」「理科」に「日本史A」「日本史B」などAB科目登場

98年 「地理歴史」で初めてとなる得点調整

2003年 最多の60万2887人が志願

04年 短大も利用可能に

06年 英語のリスニングを導入

15年 「理科」に「化学基礎」などの基礎科目登場

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.